**長浜市教育センターだより**　令和７年度　第５号
令和８年３月１３日発行

長浜市教育センター
〒526-0292
長浜市内保町 2490 番地 1
TEL 74-3702　FAX 74-3181
E-mail:kyouiku-center@city.nagahama.lg.jp

# 玉燈

～タイトル「玉燈」によせて～
「玉」は立派なものに磨きあげる、「燈」は教え、照らすを表し、「子どもへの愛育」と「情熱に満ち溢れる教師道」をイメージしています。また、「玉燈」は、郷土の先人 國友一貫斎の代表的発明品としても知られています。

## 教師道と探究心

長浜市教育委員会事務局
教育センター所長　杉本 義明

もう十何年も前である。滋賀県教育委員会が運営している「滋賀の教師塾」の第９期生の卒塾式で、当時滋賀大学名誉教授だった住岡英毅先生が塾長として教師を志す卒塾生に、本当にゆっくりとした口調で一つ一つ言葉を選びながらこのように話された。

*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･

やり切った感がない
一生これでよいと思わない
終わりがない　教師道　というものがある
教師の価値は
　〇教えることを持っている
　〇人格を通して教える
　〇謙虚（積極的な価値　揺るぎのない自信）
　　自慢な心はおきない　卑下する心もない・・・
　　武士道に似たもの
思うようにいかないが落ち込むな
思い通りにならないことがいいこと
こつこつに尽きる
懸命になる人は・・・
最後は周りの人、同僚や子どもが助けてくれる

*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･*･･･

私は本当に遅ればせながら、「教師道」とは何か考えるようになった。武士道に似た･･･?

学力も含め、人格・幸福・未来を見据え、子どもの成長を第一に考える姿勢を持つこと。

自ら学び続ける姿勢を持つこと。

子ども・保護者・地域との関係を支える信頼と誠実さを持つこと。

専門性と人間性の両立を目指し、教科指導と人間理解の両方を磨くこと。

次世代を育てる公共的使命を自覚し、社会への責任を負うこと。

そんな自分であれたかどうかを考えると、反省しきりである。

しかし、「教師道」は決して「正解のある道」ではなく、教師一人ひとりが、自分の価値観・経験・地域性を踏まえて紡いでいく“個別の道”であり、求め続ける道でもあると思います。

今、先行き不透明なこの時代を逞しく生き抜くためには、子どもたち一人ひとりの探究心を豊かに育てる必要があると言われています。

教師には、ICT 活用、特別支援・多様性への理解、データに基づく教育改善など、専門職としてのプロフェッショナリズムが否応なしに求められる時代です。

探究心は、子どもだけのものではなく、大人にも必要な姿勢です。つまり教師も「正解を教える教師」から「共に問いを育てる教師」へと役割が変わりつつあり、探究心は教師道の中心的な要素になっているのではないかと思います。

教師が探究する姿を見せることは、子どもにとって最良の学びのモデルになります。

・子どもと一緒に問いを立てる。子どもの問いを価値あるものとして扱う。「それ、面白いね」と受け止め、学びの方向を一緒に考える。
・自分の実践を振り返り、改善する。授業での小さな違和感（子どもの反応が鈍い、理解が浅い）を手がかりに、その理由を探り、授業を組み替える。
・他者の実践から学び、取り入れる。地域や他校の実践から学ぶ。自校の文化に合わせてアレンジし、学校全体の学びを豊かにする。
・データや記録をもとに改善を続ける。ノート、発言、テスト結果、行動の変化などから学びのプロセスを読み取る。
・自分の価値観をアップデートする。自分自身の価値観を問い直す 。「本当に子どものためになっているか？」と自分の指導観を更新する。

こうした姿勢が、学校文化を大きく変え、子どもたちを変えていきます。

坂口志文先生がノーベル医学・生理学賞を受賞されました。私たちもあきらめずに一つ一つ信じた道を歩むそんな強さを持ちたいと思います。

「炭火のように、内なるものを燃やし続ける･･･そんなエネルギーを持った子」を育てたい。

まさに「子どもへの愛育」と「情熱に満ち溢れる教師道」をイメージした「玉燈」の世界と重なるような気がします。

# 令和７年度 長浜市教育研究発表大会

織田　恭淳　教育長

　開会のご挨拶のなかで、「子どもたちが多様性を自身の力に変え、学校という学びの場で豊かにし、やがて社会にもつなげていくこと」「子どもたちに『学びを主体的に進める力』を育てること」という２つの大切にしたいことをお話されました。そのためにも、教師自身が柔軟な対応力を持ち、子どもたちに寄り添いながら、それぞれに適した学びを工夫していくことが大切だと改めて考えさせられました。

## 教育講演会
## 授業づくりの方向性と深め方

**京都大学　石井　英真 先生**

　大変お忙しい中、長浜市までお越しいただき、貴重なご講演を賜りました。講演では、「本当の主体性は出口で見える」「手法ではなく中身を深める」「通常学級の特別支援化」「子どもの学びと先生の学びは相似形」「『知っている・できる』や『わかる』から『使える』レベルの学力を意識した学びのデザイン」「less is more ~少なく深く学ぶことで多くを学べる~」など、多くの印象的なお言葉をいただき、学びの多い時間となりました。改めていただいた資料をご確認いただき、今後の授業づくりにお役立ていただければと思います。

　大会の最後には、虎姫学園　堤 幸士 校長先生より「各学校が主体的・対話的で深い学びを重視した授業づくりに取り組む中で、時にそれが形にとらわれ、表面的な学びになることもあるのではないかと振り返る視点の重要性を感じました。たとえ格好はよくなくても、子どもたちが本当の力をつける教育に挑戦し続けるべきではないでしょうか。」という大変力強いお言葉をいただきました。

## アンケートより

・一を聞いて十を知る　何を一として授業に取り上げるか、何を使えば次のステージ、十もの内容を子どもたち自身が追求していくか、意識して教材や単元構成を追求していきたい。刺激になった。

・生きてはたらく学力を育てるためには、子どもたち一人ひとりの多様な背景や考え方を大切にしながら、深い学びを確かなものにしていくことが重要であると実感した。知識を教えるだけでなく、それを活用し、自分の考えを広げたり他者と共有する中でこそ、本当の意味での学力が身につくのだと思う。

・「個々にもっている力は違うけれども、教室内の皆で学習することにより、それぞれの力を十二分に育てることができる…」どの学級においても、このような子どもの姿が見られるように取り組んでいきたいものです。

・石井先生のご示唆は我々教員が日々しっかり頭に焼き付けなければならないことばかりでした。単に教育が新しい方向へ向かうのではなく、今まで我々が大事にしてきた土台となる教育概念を今一度、しっかりと見直し、継承していくことがとても大事なことだと仰られているように感じました。

・「もっとくれ！」と思わせる授業ができるか。この言葉が一番心に刺さりました。今の、そしてこれからの教育は、ますます授業が大切になってきます。生徒や保護者とも授業を通して関係性を築いていかなければなりません。「授業で勝負する教師」がさらに際立つことになるのだと思います。

# 研究・研修室より
# 令和７年度 長浜市教育賞

受賞された先生方（敬省略）

　今年度は市内校園から３１本の応募をいただきました。「異年齢保育」「生徒会活動」「授業改善」など様々な分野においての研究が見られました。「構成力」「表現力」「研究内容の充実度」など１０の観点から厳正に審査させていただき、１１名の先生方が入選されました。

　ご報告いただいた論文は、先生方の現場での課題意識に基づく、素晴らしい内容でした。日々自己研鑽と実践を重ねておられることに敬意を表します。

| | | |
|---|---|---|
| 学校・園実践部門<br>最優秀賞 | 長浜西幼稚園<br>代表　網島　大輔 | 流動的な異年齢での遊びを捉え、<br>豊かにかかわり育ち合う保育をめざして |
| 個人実践部門<br>入賞 | 長浜北小学校<br>木下　恵理 | 主体的・対話的で深い学びを取り入れた<br>授業づくりに関する研究 |
| | 長浜北小学校<br>竹田　絵里 | 小学校外国語活動・外国語科における<br>「読む力」の育成 |
| | 湯田小学校<br>岡田　拓馬 | 図と言葉で考えるかけ算の学習 |
| | 速水小学校<br>堀江　咲光 | 叙述に立脚した読みを促す<br>自己調整学習の実践 |
| | 浅井中学校<br>松本　公哉 | 生徒会活動を通した自治的能力および<br>自己指導能力の育成 |
| ユース践部門<br>入賞 | 長浜北小学校<br>鹿取　陽子 | 国語科を通して主体性や表現力を育む |
| | 神照小学校<br>衣川　和将 | 対話を通して新たな見方・考え方を<br>得られる授業づくり |
| | 神照小学校<br>先山　真都梨 | 子どもが主体的に取り組める授業づくり |
| | 速水小学校<br>柴榮　格斗 | 誰とでも学び合い、高め合える授業づくり |
| | 西中学校<br>北川　翔太 | 同僚性を高める西中学習会 |

　末尾ながら、本年度研修にご参加いただいた先生方、長浜市教育賞にご応募いただいた先生方、研究をはじめ諸事業でご協力いただいた先生方、そして、多大なるサポートをいただいた管理職の先生方に心よりお礼申し上げます。今後とも当センターの研究・研修事業に対しご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

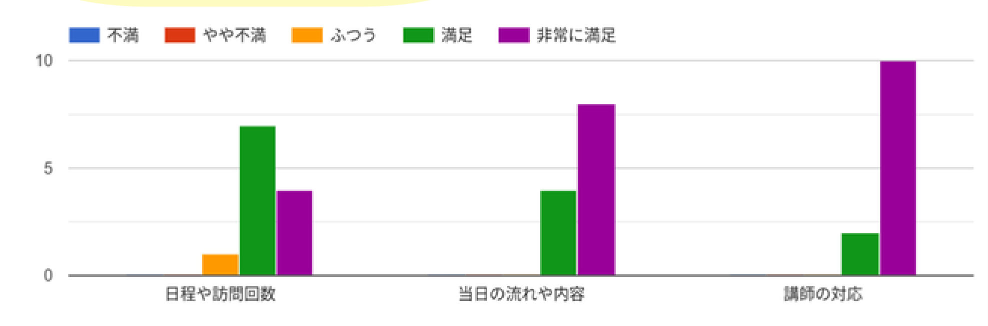
# 令和７年度 発達サポート事業

**教育相談室**
**発達支援グループ**

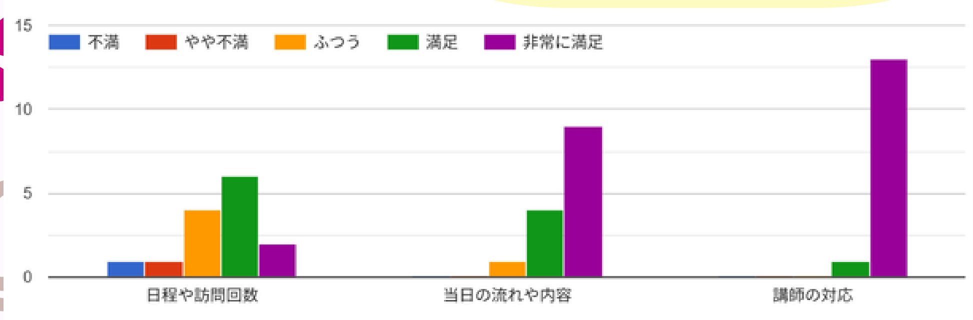
令和７年度は小学校20校に訪問し、体の使い方、体づくりの専門家である作業療法士の中瀬先生、視機能の専門家であるオプトメトリストの髙橋先生に、専門的な視点から子どもの様子をアセスメントしていただき、トレーニング方法や環境調整等、個に応じた支援方法を提案いただきました。

## 事後アンケートより

作業療法士:１４校回答




オプトメトリスト:１２校回答



・視覚に関する知識に乏しかったため、いろいろ勉強させていただきました。児童へ手立ても具体的に指導していただき、日常での実践に繋げることができました。児童も前向きに取り組むことができました。
・児童の視知覚についてアセスメントしていただき、丁寧に支援の方法について教えていただけたことがとても良かったです。また、医療の必要な児童について医療の情報を教えていただき、実際に繋げることができました。
・児童と関わっていただき、具体的な支援を教えていただけたことが、とても有意義なことだと感じました。いつも一緒に活動してくださり、支援の仕方を明確にしてくださるのでありがたいです。
・限られた児童や学年になりますが、どの学年にも気になる児童は見られます。子どもの発達やその支援について知っておくことは大事だと思います。この機会が教員の研修にもなればと思います。
・回数を増やしていただけると、取組がこれで良かったのか検証できる。

事後アンケートにありますように、専門家からの支援の提案をもとに各校で取り組みを継続いただきました。
子どもの課題の背景を探る一つの手立てとして、専門家の視点も参考にしていただければと考えています。
令和８年度も本事業を実施する予定です。ぜひご活用ください。

本年度の教育相談室事業にご理解ご協力いただき、ありがとうございました。